

## 小児慢性疾患(臓器系)に関する研究

評価委員 国立京都病院 高 安 正 夫

この研究班のもつ研究分野は甚だしく広大であり重要且つ困難な課題を多数抱合しているので昭和51年度第1回の研究班が終結するにあたって、夫々一応立派な成果を挙げたもののもとと2～3年の間に解決のつく問題ではないので52年度以降第2回の研究班の編成が試みられ内容および研究者の多少の変更を加えて今回の再編成がなされたものとする。したがって研究課題についても重要な9つの課題にしばり班員および協力研究者は広く全国レベルで選考され夫々の専門家を網羅されておりまことに当を得た企画と思われる。

この3ヶ年の実績をみても各班とも広範に真摯な研究が積み上げられていて多大の効果を挙げたものとするが、なかでも協同作業としてその大多数が夫々の診断基準管理基準治療方針あるいはその原則手びきなどをまとめられたことはまことに大きな成果であるとする。当然いろいろ問題もあり意見の不一致な点もあったかと思うがもともとそう単純に割り切れるものではなく困難も大きかったと思うがそれなりに一般の医師患者あるいは監督者父兄などの日常臨床にあるいは生活に一つの大きな方向を示されたものであり必ずや実際に役立つものであり評価されてよいとする。

しかし乍らこの小児慢性疾患の問題はその範囲も大きく且つ難題が多く必ずしも今回の成果ですべて解決したものとは考えられず今後も形をかえてでも残された問題解明に努力を続けて行かれることを期待したい。

なお夫々の研究課題につきすべてを評価することは専門外にも及ぶので伍に耐えないが以下そのいくつかについて意見を述べて責をふさぐことにする。

### ○小児心筋炎に関する臨床的研究

ウイルス感染により心筋が犯され急激に甚だ強烈な心症状を呈し心電図、酵素反応にまで著明な変化を来すことが明らかにされた。これら感冒様症状あるいは消化器症状に引きつづき急激且つ重大な心症状を呈して来るウイルス性あるいは原因不明の急性心筋炎は小児では殊に問題が大きいので一般医師の十分な認識が必要でありすみやかに対処できるようにすることが大切と思われる。その意味でもこの「ウイルス性および特発性心筋炎の診断の手びき」として要点をまとめられたことはまことに大きな成果と考えられこれによって日常臨床に寄与するところが大きいと思う。

また同時に急性から慢性に至るまでの病理診断基準をまとめられたことはその病像の病理解剖学的裏づけまで整うことを示すものとしてその価値は高く評価されるべきものとする。

### ○先天性心疾患手術後の長期予後調査と管理基準に関する研究

先天性心疾患の手術成績およびその普及は今日までに大きく進歩向上したが手術により治療がすべて完了したとは限らず長期にわたって追跡しその状況に応じて管理をおこたうことはできないのは当然である。しかし多岐にわたる先天性異常について夫々適切な管理基準を作製することは容易ではない。本研究班で夫々の場合に術後の経過によって詳細に日常の管理に関する基準を作られた労苦は決して並大抵のものではなかったと思う。その困難を克服してこまかに指示を与え長期にわたる追跡すべき期間も含めた表を作られたことは敬服に値するものとする。

また学校における日常の生徒の指導はややもすれば危険をおそれて厳になり易くかえってよくない場合があったと思われる上在来の管理基準は具体性に乏しかった面もあり学校での活動許可の判断に迷うことが多かったと思うが今回の心臓病管理指導区分(家庭通知用)は体育の夫々の運動内容を細かく挙

げ示され学校側校医養護指導などにとっても父兄にとっても非常にありがたいものと思われる。その意味でも実際の効果は大きく高く評価されるべきものとする。

#### ○川崎病の突然死に関する研究

本研究班の調査により川崎病は各地域に益々多数になりつつありしかも冠動脈の動脈瘤などの変化が以前考えられていたよりはるかに多く且つ後年にその影響が及ぶことが案じられる状況が明らかになった。しかもその原因についてはいろいろ考えられてはいるが諸説紛々として未だ十分明らかになったとは言えない。またこれが突然死の一因であるから重大な問題である。そこで本班ではその疫学的調査から臨床治療方針その後の管理病理学的検討まで広範にわたり詳細な研究が進められ、一般的治療方法および現時点で最善と思われる管理方式など一応班員の一致した意見をまとめその治療と管理に関する提案を出されたことはまことに時宜を得た措置と考えられ高く評価したい。そして少しでも本病の発生とそのための犠牲を最小に止める資料となることを期待したい。同時にこの重大な問題は予防をも含め今後解決を急がねばならぬことでもあり何らかの形で引き続きその原因究明その他追跡などを進めて行くべきであるとする。

#### ○日本人小児の高脂血症に関する疫学的並びに臨床的研究

動脈硬化は成人病の原因として重大であるがこれはずでに小児期から始まり虚血性心疾患などの予防は小児の頃から始める必要性が言われるようになりこの課題が取り上げられたと思われるが各地域で疫学調査が始められた結果血清コレステロール、トリグリセリッド HDL コレステロールの検討ではなおはっきりした一定の傾向はみつからず年度によっても差があるようでもあり広範囲に相当長期間継続してゆくことが必要と思われる。

しかし一方肥満度と高脂血症は正の相関を HDL-コレステロールとは負の相関がみられると言いままた家族的危険因子を持つものは一般より高く、糖尿病児にはそのコントロールの良否との関連があるなどその他にも検討が加えられ一応成果は認められるがむしろ今後の長期にわたる継続作業が必要と思われる。

## 評 価(意見)

評価委員 日本医大小児科 村 上 勝 美

研究課題はいずれも重要なもので、その選択は概ね妥当で、それぞれ程度の差はあるがある程度の成果が見られる。

とくに「日本人小児の高脂血症に関する研究」はきわめて重要な意義を有するもので疫学的には一応成果があげられている。HDL の測定については基礎的に問題があるように諒解しているし、また index の表現について班に不統一がある点などに問題がある。しかし、HDL の意義について成人の IHD と短絡的に結びつけて考えることには現段階では無理があり今後の幅広い、奥深い、longitudinal な臨床的研究が必要であろう。

われわれは MCLS で HDL の著明な低下例を見、follow-up によって変動のパターンを追求し、MCLS の重症度後遺症有無判定のパラメーターの 1 つとなると考えている。またある種のウイルス性疾患でも HDL の低下が見られるので高脂血症だけを問題にせず、脂質の細かい分析にまで研究を進めることが望ましい。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



この研究班のもつ研究分野は甚だしく広大であり重要且つ困難な課題を多数抱含している  
ので昭和 51 年度第 1 回の研究班が終結するにあたって、夫々一応立派な成果を挙げたも  
ののもともと 2~3 年の間に解決のつく問題ではないので 52 年度以降第 2 回の研究班の編  
成が試みられ内容および研究者の多少の変更を加えて今回の再編成がなされたものと考え  
る。したがって研究課題についても重要な 9 つの課題にしぼり班員および協力研究者は広  
く全国レベルで選考され夫々の専門家を網羅されておりまことに当を得た企画と思われる。